

御受賞に寄せる

教育学部 沼本克明

「ガラスケースに納まった巻物の小さな調点を、押し寄せる人混みの中で、一つも落さずに模写するには、日参しなければならなかった。この墨筆の調点に注目して模写を続けている間に、墨筆の調点とは別に、色彩ならぬ、爪で迹を付けたような仮名と、先の細い針状の用具で圧したようなヲコト点とが、同じ本文の中に書き加えられていることを、同席の築島裕博士の注意で見得た。時に（昭和三十六年）九月十三日であった。」（小林芳規著『角筆のみちびく世界』（中公新書909、1989年刊）の冒頭の一節）。文学部国語学講座教授小林芳規博士が、丁度三十年後の本年、学者として最高の荣誉である恩賜賞、学士院賞をダブル受賞されるに至るその出発となる一瞬を、博士はこの様に記述されている。我が国における「国語学」という学問の歴史は古く蓄積も深い。就中、国語の歴史の究明は重要な位置を占めて来た。戦後に入ってその究明の急激な展開を促す新資料群として調点資料が一層注目され始めた。中国渡来の漢文を日本語として読み換える為に漢文本文に加えられる返り点、振り仮名、符号（ヲコト点）を総称して調点と呼ぶ。奈良朝末期から残るこの各種多量の文献の調点を正確に解説することによって国語の歴史を究明しようとするのが調点語学である。当時、小林博士は、この調点語学の将来を担う少壮学者として囑望され、漢文訓読史のすぐれた論文を次々と世に問われつつあった時期での出来事である。

文字は墨で書かれる。従って、竹や木或いは象牙などの先を細く削った筆、即ち「角筆（カクヒツ）」で、紙面を凹ませて文字が書かれているなど、常識の埒外であった。次々

と小林博士、そして後に協力者達によって発見されることになる角筆文献の中に、幾人もの研究者達に既に閲覧されながらも全く気付かれないことになかった国宝級の著名な文献が多数含まれていたことも、従って、いわば必然であったろう。ともかくも角筆の一点目はそのようにして偶然に発見された。が、小林博士の偉大さは、昭和三十七年八月三十一日に発見された続く二点目の背後に群を直感した所にある。以後、小林博士は角筆を執拗に追いかけて行く。

斯くて、昭和六十二年七月、その研究の成果は『角筆文献の国語学的研究』（研究篇一二二頁、影印資料篇二五四頁、汲古書院刊）総計一三七六頁の大作として結実した。今回の受賞の直接の対象となった業績である。扱その業績の価値は奈辺にあるのか。極々簡略に紹介しておこう。既に述べた如く、従前の国語史研究は角筆に全く気づかれないままに行われて来た。功績の第一は、角筆文献という新しい国語史研究の資料群を、多量に広く学界の共有財産として提供したことにある。第二に、その新しい資料群の緻密な分析を通して、国語史研究の中心的課題である口語史に、幾多の新しい知見を付け加えることに成功したことである。そしてもう一つ重要な点は、我が国に、奈良時代から江戸時代末期までの永きに亘って一それは、我が国に鉛筆という便利な筆記用具が導入されるまでと言いつても過言でない、角筆が日常の筆記用具として使用されていた、という日本文化史上の隠されていた事実を闡明してみせたという点である。

所で、小林博士の学問は、本道は漢文訓読

史の研究にあり、角筆文献の研究も、小林博士にとっては、実はその過程で作上げられた副産物にすぎない。その漢文訓読史の研究では、若くして『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（昭和四十二年）という大著を上梓され、東京大学国語国文学会賞の対象となった。昭和五十七年には、漢文訓読史研究の成果を縦横に駆使して、日本の代表的古典である古事記の解説に新しい道を拓いた『古事記』（岩波日本思想大系）を出版され、学界に衝撃を与えた。昭和六十二年には、永年に亘りこの広島で小林博士が主宰されている「鎌倉時代語研究会」に対し新村出記念賞が授与された。その他、訓点資料を中心にしつつも、広い視野に立ち折々に纏め発表された多量の著書、論文は、国語学界全体を刺激し続けて来たのであり、今回の賞は、そういう幅広く重厚な小林学の全体に対して与えられたものと見る事が出来る。

扱、その様な小林学の発展充実を支えた環境にも、私は興味を持つ。筆者は、教え子の一人として、屢々全国の古寺経蔵にある訓点資料の調査に同道の機会を与えられて来た者であるが、小林博士の傍には、常に博士が兄事される一人の訓点語学者の姿が有った。即ち東京大学名誉教授築島裕博士（現国語学会代表理事、昭和三十九年日本学士院賞受賞）である。私は、多分、この築島博士の存在―それは当然学問上のライバルでもあったはず―が、小林博士を駆り立てたものと思う。妥協を許さない小林博士の天賦の資質と相俟って、お互に上に向かって引き揚げ合うその競争心が、小林学充実のエネルギー源であったと信じる。

小林博士は、昭和六十年秋、中国北京に「日本学センター（大学院コース）」が新設されるに伴い、第一回客員教授として赴任された。その機会に中国の角筆を訪ねて諸所を歴訪され、請われて講演もなされ、中国に角筆研究の種を播いて帰国された。そして昭和六十三年六月刊『杭州大学学报』には王勇助教授の論文「角筆及角筆文献」が掲載され、その一

節に「1985年以来、小林芳規博士利用到中国講学的機会、遍訪各地、苦心尋覓、發現了疑為角筆及角筆文字の实物、這對中国的學術界無疑是一介巨大的刺激」「期望在不遠的将来、中国的角筆文献研究会出現突破性的成果」（原文簡体字）とあって、角筆が世界的規模で研究対象となり始めた。一方、国内での角筆に対する知識の普及の為に、三原の御調八幡宮で角筆と角筆文献が発見されたのを機会に、平成元年七月に初めて大々的な角筆展を三原市で主宰された。この様な地方の學術文化の高揚を含めた、広い功績に対しては平成二年度中国文化賞が授与されている。

降って平成二年十月、高知大学で国語学会全国大会が開催され、小林博士は「方言資料として観た角筆文献」と題する公開講演を持たれた。日本のあちこちで角筆文献が発見され始めた今日、藁の筆記具としての角筆は、各地方の古い時代の方言をなまなましく記述しているものであって、方言史の研究に新しい道を拓く、その可能性の一斑について述べられたものである。そしてその最後を「皆さん一緒に角筆文献を探しませんか」と結ばれた。角筆文献によって、新しい国語史研究の道を切り拓こうとする熱意の込められた講演であった。が然し、講演会において、人々に、尚そのように訴えねばならないということは、「角筆」が未だ特殊扱いであることを物語っている。

今回の受賞は、お茶や能や歌舞伎などと共に、日本文化史を形成した重要な一部分として「角筆」が広く知れ渡り、市民権を得て行く契機になると思う。否、中国から日本へという単なる一元的なものではなく、斯様な生活文化の一形式がかつて世界中に存在していたことが明らかになるかも知れない。夢は脹らむ。広島大学の皆さん、また広島大学で学ばれる各国の留学生の皆さん、その目で自国の角筆を探ってみてはどうでしょうか。

称揚の意を十分尽し得ていないのを遺憾としつつ御受賞に寄せる拙い文を欄筆とする。